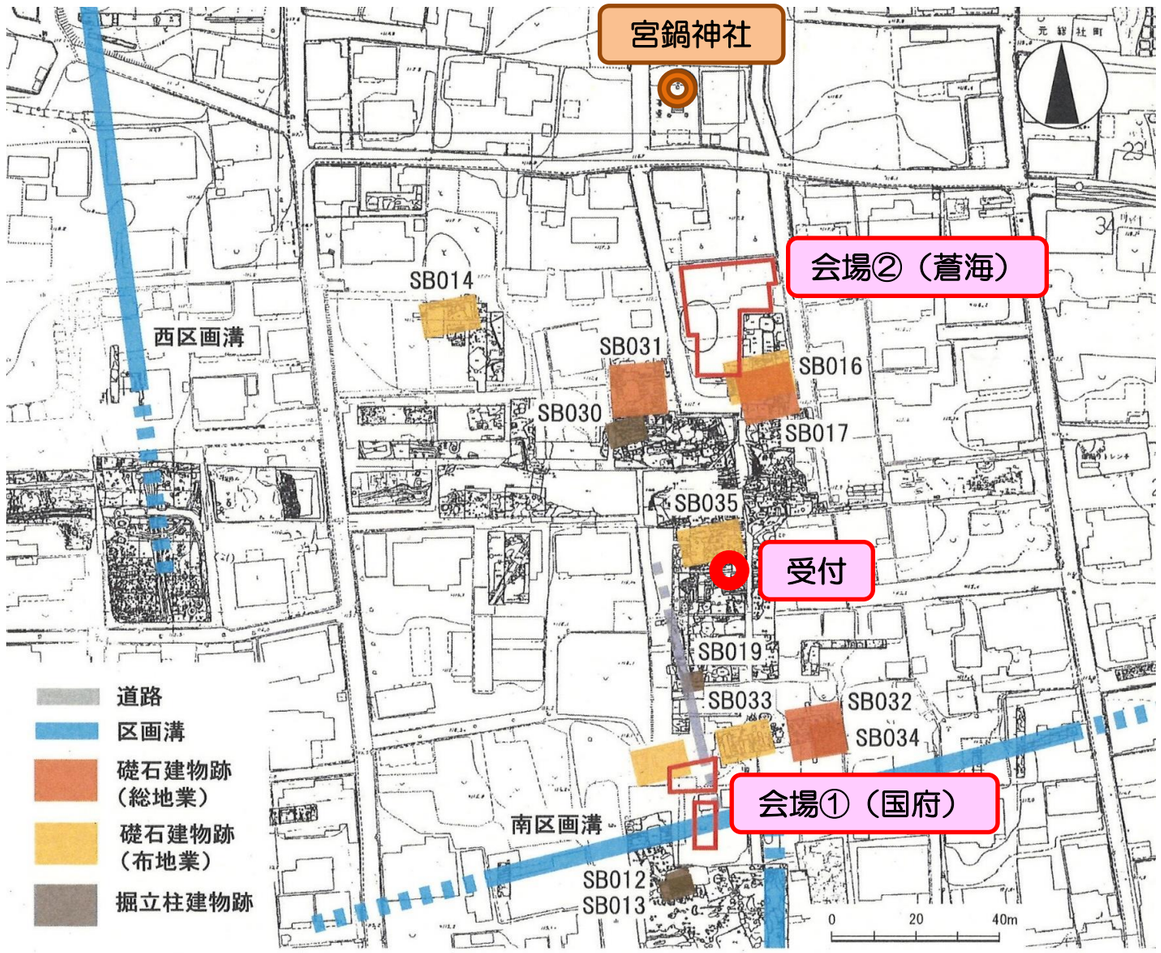
上野国府等範囲内容確認調査・元総社蒼海遺跡群(147)

発掘調査現地説明会資料

～古代の役所に関連する建物群の調査～



～はじめに～

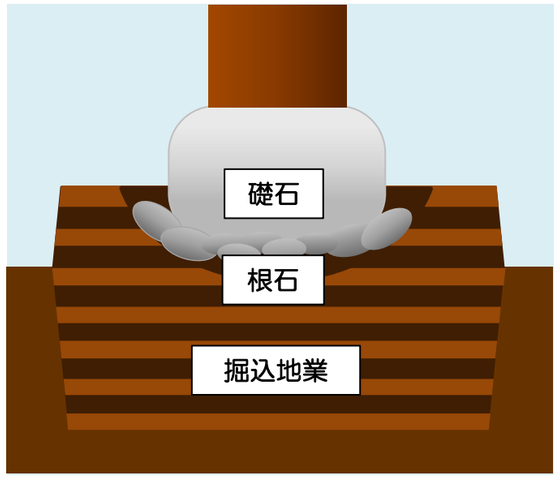
前橋市教育委員会では、元総社町の蒼海地区で、区画整理事業に伴う発掘調査や上野国府の範囲内容確認調査を継続的に実施しています。

今回の発掘調査は、総社神社が元々鎮座していたとの伝承をもつ「宮鍋神社」の南側で行いました。調査の結果、古代の役所に関連する建物群の一部や、これらの建物群の周囲を区画すると考えられる溝跡のほか、古墳時代から平安時代にかけての竪穴建物跡、中世の城郭である蒼海城の堀の一部などが見つかり、地域の歴史を考える上で、貴重な成果を得ることができました。

ワンポイント解説

今回の現地説明会でキーワードとなる専門用語について説明します。

- 掘込地業（ほりこみじぎょう）
- 版築（はんちく）
- 礎石（そせき）
- 根石（ねいし）



掘込地業と柱の建て方（模式図）

何層にも重ねられた版築

奈良の都の宮殿やお寺、さらには地方の役所の倉などの建物は、建て方を工夫しないと、建物が地面に沈んで傾いたり壊れたりしてしまいます。それを防止するために行われた工法が「版築（はんちく）」による「掘込地業（ほりこみじぎょう）」です。

掘込地業は、建物が自身の重さで沈まないように、必要な範囲の地面を深く掘り込み、その中に土を薄く入れて突き固め、それを何層も重ねることにより建物の基礎を固くするものです。版築は、地面より下の掘込地業だけでなく、地上に出た部分にも、木枠などを使うことで施すことができ、宮殿や寺の建物の土台のほか、敷地を仕切る壁を作る際にも採用されました。身近に見ることができるところでは、上野国分寺跡の南側に復元された塀は、版築によって作られています。

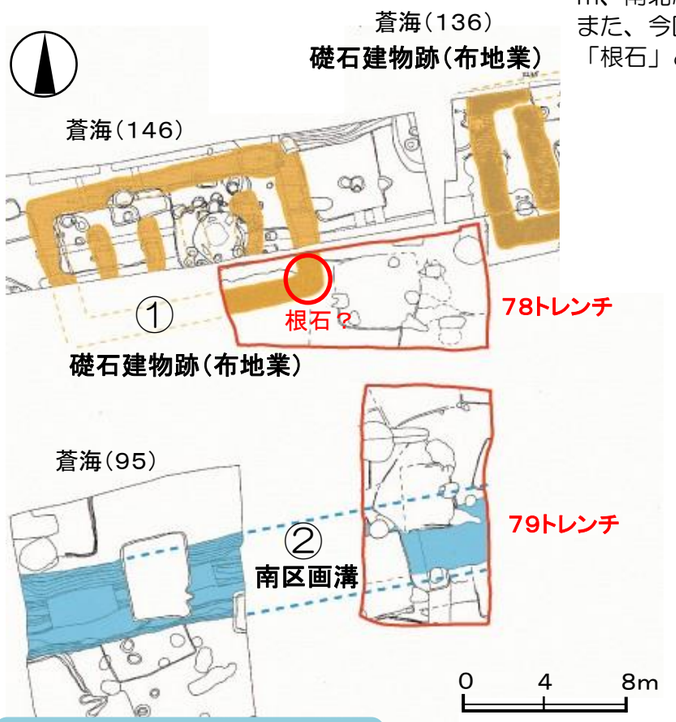
こうして固く締めた地盤（掘込地業や基壇）の上に建物を建てるときは、一抱えもあるような大きな石を平らな面が上になるように据えて、その面に柱をのせました。この石を「礎石（そせき）」とよびます。この礎石が動かないように、20～30センチの石をたくさん使って固定しました。この固定に使った石を「根石（ねいし）」とよびます。

建物が無くなったあとに、礎石が取り去られてしまうことがあります。しかし、その下に残る根石や、それらを据えた痕跡であるくぼみが発掘調査で見つかることがあります。その位置を調べることで、今は姿を見ることができない建物の大きさがわかります。

上野国府等範囲内容確認調査・元総社蒼海遺跡群(147)　発掘調査現地説明会資料
～古代の役所に関連する建物群の調査～
令和４年９月２３日発行　前橋市教育委員会事務局文化財保護課
群馬県前橋市総社町三丁目１１番地４／TEL：027-280-6511

1　上野国府等範囲内容確認調査の成果

令和４年度の上野国府等範囲内容確認調査では、昨年度の元総社蒼海遺跡群の発掘調査で検出された礎石建物の掘込地業の一部を検出しました。そのほか、建物群の南を区切るために掘られた大きな区画溝について、その一部を発掘調査し、区画溝の様子を把握するための発掘調査を行いました。



①礎石建物（布地業）と根石

この礎石建物は、昨年度の元総社蒼海遺跡群（蒼海１４６）の発掘調査で全体の約３分の２を調査しましたが、全体像が不明だったため、残りの部分の確認のために今年度、範囲確認調査を行いました。その結果、掘込地業の南東隅を確認することができ、東西約１３m、南北約８mの規模をもつことが確認できました。また、今回の調査では、礎石を据えるために設ける「根石」と考えられる石が出土しました。

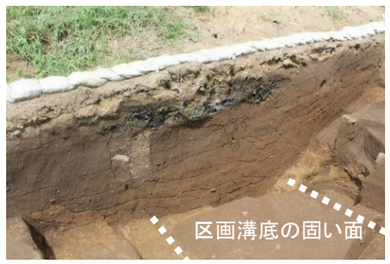
版築の断面

礎石の根石と考えらえる石

②南限の区画溝

礎石建物から南へ約１５m行ったところにおおむね東西方向の古代の大溝が掘られていました。この大溝は、たくさんの礎石建物が建つ「施設」の南側を区画するための区画溝と考えられます。

この区画溝は底面が二段になっているほか、部分的に細いテラス状となっていることなどから推測して、何度か掘り直しをしている可能性が考えられます。また、底面と溝が埋没した直後に、固く締まった面が確認されていることから、区画溝として使用されなくなった後に道路として利用されたことが考えられます。



区画溝の断面（上）と、溝の上層の道路面（右）

2　元総社蒼海遺跡群(147)調査の成果

今年度の区画整理に伴う発掘調査では、新たな礎石建物を2棟検出したほか、平成26年の調査で確認された礎石建物の一部を検出しました。今回新たな礎石建物が2棟発見されたことにより、周辺で検出された礎石建物は計10棟となり、宮鍋神社南側の建物群の様相が徐々に分かってきました。

①礎石建物（総地業）

今回の調査で新たに発見された建物跡です。掘込地業の範囲は、東西約11m、南北4m以上の規模であることが確認できました。

この建物は、②の7世紀後半の溝跡を壊して造られ、10～11世紀頃の竪穴建物によって壊されていることから、8～9世紀頃に機能していた建物と考えられます。

②建物跡より古い溝跡

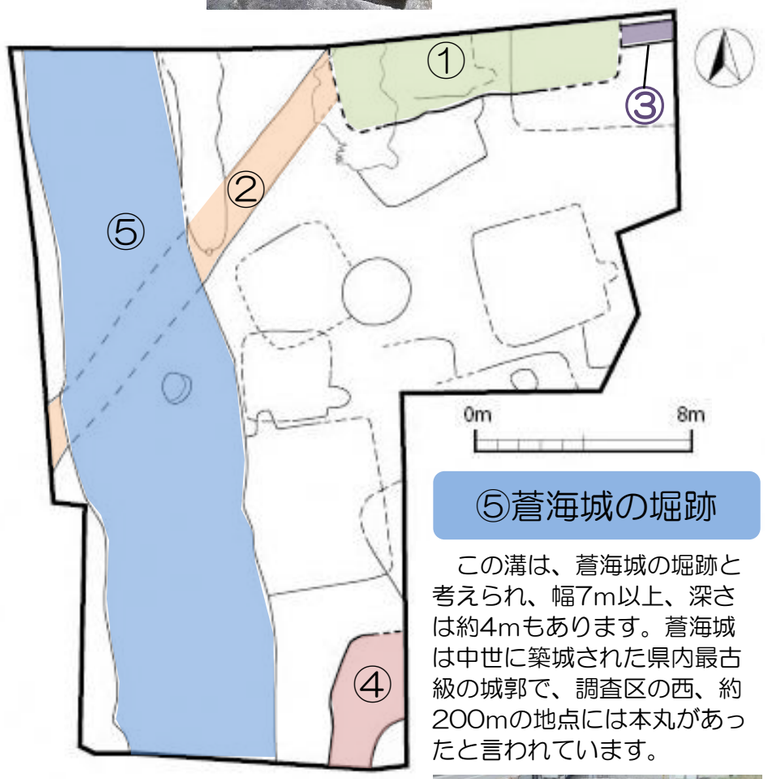
建物群とは方向が異なり、北から東に大きく傾いて走行する溝跡です。出土遺物から7世紀後半頃の溝跡と考えられ、溝の北端は、①の建物に壊されています。また、この溝跡の堆積土中には固い面があり、埋没する過程で、人が歩くなど、道路として機能していた時期があったと考えられます。

③礎石建物（布地業）

今回の調査で新たに発見された建物跡です。掘込地業は、柱列の下を溝状に掘って地盤を固める布地業と呼ばれる工法で行われています。

掘込地業のわずか一部が確認されたのみであり、建物の規模等は不明ですが、①の建物跡によって壊されていることから、①より古い建物であることが分かりました。

④礎石建物（布地業）



平成26年度の調査で発見された建物跡です。今回の調査では建物の北西隅を確認しました。

③の建物と同様、布地業を用いて掘込地業を行っています。

⑤蒼海城の堀跡

この溝は、蒼海城の堀跡と考えられ、幅7m以上、深さは約4mもあります。蒼海城は中世に築城された県内最古級の城郭で、調査区の西、約200mの地点には本丸があったと言われています。